

吸血鬼ハンター

D-1 蒼白き墮天使 1

菊地秀行



ソノラマ文庫

ソノラマ文庫<682>

吸血鬼ハンター⁹

D—蒼白^{あおじろ}き墮^だ天使^{てんし} 1

落丁本，乱丁本はお
とりかえいたします

1994年7月30日 第1刷発行

著 者 菊 地 秀 行

© Hideyuki Kikuchi 1994

発行人 君 島 志 郎

発行所 株式会社 朝日ソノラマ
東京都中央区銀座4—2—6
第2朝日ビル (〒 104)

振替番号 00120—6—40311

電話番号 03—3563—6021～3

印刷所 株式会社光邦

製本所 光和製本株式会社

ISBN4 - 257 - 76682 - 4 Printed in Japan

ソノラマ文庫

D——蒼白き墮天使 1

菊地秀行



朝日ソノラマ

目次

第一章	奇妙な道連れ	5
第二章	七人の刺客	44
第三章	牙竜 がりゆう の罟	82
第四章	タロスの武器庫	123
第五章	麗娘妖雲 れいじようよううん	160
第六章	辺境の手妻師 てづま	200
あとがき		236

イラスト／天野喜孝

第一章 奇妙な道連れ

1

月光是公平なはずなのに、その道だけが青い蛇のように浮き上がって見えた。

周囲は闇であつた。

葉擦れがせわしない。風が出ている。

道は街道であつた。

昼間は比較的、人や馬車の往来が多いが、夜ともなれば、西部辺境名物の形態変化^{へんげ}人や、元素変換虫がうろつく怪奇王国と化する。

今夜もその領土を侵犯した不運な旅人がいるらしい。

五、六個の奇怪な影が、長身の人影を取り囲んだのは、街道の端に放置された定期乗り合い

馬車の停車場前であつた。

停車場には、万が一の用心にボルトを射ち出す火薬銃と短槍、長剣が取り付けられていたが、人影はそれを手にする風もなく、緑色の燐光を放つ眼が、飢え切った視線を浴びせかけるままにしていた。

妖しい影どもがすぐ襲いかからぬのは、植えつけられた貴族の精神が放つ残忍性——死ぬまで脅えさせるためかと思われたが、そのとき、それをくつがえす闇の言葉が、

「どうした、来ぬか？」

と訊いた。

すると——待っていたのは、妖物ではなく、その人影なのか。

「では、来やすいようにしてやろう。——来い」

最後のひとことと同時に、別の光が闇を侵した。

たばしる紅のかがやき。

その刹那、左右から二つの影が跳躍した。ひとつは、元素変換虫であつた。

オオカマキリに似た身体が、空中でみるみる硬質の変貌を遂げる。有機質から無機質——鋼へと。

月の光が地面から迸った。

いかなる攻撃も撥ね返すはずの肉体は、野菜屑のように分断され、油のようなものを撒き散らしながら、地に落ちた。

同時に反対側に着地した吸血蛾人間も、その羽根から黄金の燐粉を跳ねとばしつつ、縦に両断された。彼らの鎌のような爪と吸血チューブは、目標を捉えることさえできなかったのである。

「来い」

次の誘いに応じて、雷獣が六本の足を踏んぱりながら、兜に似た頭部を天空へ向けた。人影の身体を青白い稲妻が打った。空気はイオン化し、大地は白煙を噴いた。稲妻は幾度も人影を叩いた。

人影が右手を上げた。その手には、優雅なカーブを描く、黒刀が握られていた。この辺の旅人や戦闘士、武術者が手にするはずもない光沢を放つ剣は、持ち上げられた瞬間から天空へと直立するまで、稲妻を吸収しつづけた。

それが胸元に突きつけられても、雷獣には何が起きたのか理解の外であつたろう。稲妻は刀身にまつわり、その意志を読み取るかの如くに、切先から雷獣の顔面へと吸いこまれたのである。

怪物は痙攣した。自らの身体を使うに非ず、空中放電を駆使して相手を感電死させるこの怪

物は、防電機能を有してはいなかったのである。

なおも青白い光を刀身に絡からみつかせたまま、人影は一刀をふり上げ、ふり下ろした。腕はもう限界まで伸びていたはずなのに、雷獣の頭部を二つに裂いた刀身は、三〇センチも突き出ていた。

「あと二匹——来いといいたいが、用人が来たようだ。——行け」

人影がこう命じると、その場に硬直して運命を待ち受けていた生き残りは、低く呻うめくや、一目散に道の両側の闇へと消えた。瞬間移送ト・ボートでも使ったみたいな猛スピードであった。

ひとふりして刀身についた血潮をふるい落とすと、人影はゆっくりと後方をふり向いた。

北から走る街道の北側に、一組の騎馬の影が浮き出ていた。

月光は青いのつばひろに、馬上の主ばかりは、闇よりもさらに濃い闇色を身にまとっていた。

鏑つばひろの旅人トラベラーズ・ハット帽の下で、不思議な光を放つ双眸そうぼうが人影を見つめている。

人影は足下の雷獣の死体をまたいで、前へ出た。

闇の一角に青い領土が出現した。——そんな感じだった。深い海の色のようなマントが、人影の首から下を覆っていたのである。その腰のあたりで、ちりと鳴ったのは、いま、刀身を鞘さやに収めたらしい。

「バラージュか？」

と馬上の黒い騎主は訊いた。

「その通り。さすがは当代一のハンター、時間に正確だな」

と言つても、時計が何かを見る風もなく、しかし、騎馬が現れたのは、まさしく、彼の指定時刻だったのである。

「ついぞと言つては何だが、現れた瞬間、身が震えた。でなければ、あの二匹も逃さぬところであつたが」

すると、馬上の主は、地上の使い手に寸前まで気配も覺らせず接近してきたらしい。

「おれがこの街道へ入ったときから、気配は察していたはずだ。——消したつもりだったが」
と黒い騎主は言った。

すると、地上の人影は、馬上の主の存在をとうに知りながら、嘘を——お世辞を言ったと見える。

どちらが正しいのか。

「用件をきこう」

と黒い影は言った。

「下りて来ないか？ 旨い酒がある」

返事はない。

人影は別段、気を悪くした風もなく、

「では、言おう。私をクラウハウゼンの村まで送ってもらいたい」

ここから西へ二〇〇キロ——辺境の果てにある村である。果てといっても、その向こうには数千メートル級の山脈が峻巖しゅんげんとそびえ立つばかりだ。

「ひとりで行けぬ身でもあるまい」

と馬上の声は言った。

「それがそうもいかん」

と青い人影は答えた。

したたり落ちるような金髪と碧眼へきがん。凄まじい美貌びぼうの主であった。月光がそれに神秘さをつけ加え、周囲の万物をかすませてしまいうさだ。

ただひとり——馬上の騎主を除いて。

「その村には私の訪問を歓迎しないものがある。近づけば、たちどころに迎撃してくるだろう。正直、ひとりでは自信がない。君の助けがいるのだ、Dよ」

「おれの同行を求める理由をきこう。腕に自信がないなどとは言わぬことだ」

「ひとつはもう、わかつているはずだ。もうひとつは言えん。その村に待っている相手は貴族だ。それを斃たおしてもらいたい。——これで勘弁してくれたまえ」

Dは無言で奇妙な依頼主を見つめた。彼に貴族の抹殺を求めるのは、確かに筋が通っているが、理由を口外しないのはルール違反であつた。先刻からDの態度はどこか不可思議であつた。彼は背を向けた。

「待ってくれ」

と青い影——バラージュが呼びかけた。

「肉親の恥をさらしたくはなかったが、仕方がない。——クラウハウゼンの貴族の名は、ヴラド・バラージュ。私の父親だ」

馬首が再び巡った。

「なぜ父を誅する^{ちゆう}のかは訊かないでもらいたい」

とバラージュは硬い声で言った。

「私は父を斃さねばならない。それだけが目的だ。余計な奴らを相手に力を削ぐ^そわけにいかん。吸血鬼ハンターが貴族の依頼を受けるなど、前代未聞の話だろうが、曲げて頼む。——承諾してはくれまいか？」

沈黙があつた。Dとはいえ、これは沈黙せざるを得まい。

吸血鬼が、まさに彼らを滅ぼすための存在に助力を依頼し、しかも、自ら狙う敵が肉親であ

ろうとは!? 前代未聞も未聞だが、まさしく奇々怪々以外の何ものでもあるまい。世にも美しい若者の脳裡のうりを、どんな想いがかすめたか。

やがて――

「よかろう」

とDは答えた。馬上から。青い影へ。

「感謝する」

と青い影は言った。

「私は城から出たことがあまりない。道中は君の指示にまかせたいと思うが」

「よかろう」

「ありがたい。で報酬は――」

バラージュの口にした金額は、常識をきっかり百倍越えたものであった。

「これは前金だ」

彼はマントの内側から小さな布袋を取り出してDへ放った。左手で受け止め、Dは中身も見ずに、

「よかろう」

と言った。

それは同量の黄金百倍の価値を持つ貴金属であった。

「では——おれという間、人間の血を吸うことは許さん。万が一、その禁を破ったら、おれはその場でおまえを滅ぼす」

「承知した」

バラージュはきっぱりと言った。どこか、黒衣の主に似た声であった。

「で、正式な名を名乗らずにいるのも礼を失しよう。私は、西部辺境統制官ヴラドの息子バイロン・バラージュだ」

2

客観的にみれば、おかしい——どこか驚天動地の道行きにちがいない。

吸血鬼ハンターとともに旅する依頼人が、彼に狩られるべき吸血貴族ときた。

もちろん、彼が活動できるのは、夜だけだ。これが、Dも知っている、と男爵が告げたひとつの理由である。昼のあいだ、彼は青い四頭立ての馬車に乗って移動した。妖物どもと戦ったときには、少し離れた森の奥に止めてあったものである。

四頭のサイボーグ馬には、Dに従えとの指示を吹きこんであるらしく、素直についてくる。

だが、誰が見ても、これは貴族の乗り物だ。昼間、道を行けば、通行人や旅人は眼を剥いて立ちすくむ。道から隠れる。中には武器を構える奴までいる。

しかも、先導しているらしい若者が、どう逆立ちしても人間には真似られっこない、天上の美貌の主ときている。

路傍ろぼうの人々の頭脳に、ある考えが共通して閃くひらめのは、この上なく当然といえた。

——あれは貴族とその従者だ。

貴族の従者には生身の人間もいる。多くは、彼らの仲間に加わる寸前で吸血をストップされ、一種の催眠的服従状態に陥おちいった連中だが、中には正気でありながら心底からの忠誠を誓った——いわば「裏切り者」もいる。Dはそう見えたであろう。しかしながら、そう考える人々の表情に困惑の翳かげがゆれるのは、やはり、Dの美貌のゆえであった。

普通なら、昼間は人目につかない裏街道を通って、夜、街道をゆく。いや、昼間は森の奥かどこかで眠り、夜のみ行動する。貴族の性癖せいへきに従うなら、その方が合理的だ。

だが、Dは昼ひなかから堂々と街道を進み、夜は足を止めた。

「なぜ、夜も行かん？」

こう男爵が訊いたのは、旅をはじめてから三日目の晩であった。

「急ぐ旅か？」

「いや」

「退屈か？」

「いや」

馬車の内部には、Dも知らぬ娯楽施設が備えつけられているにちがいない。貴族たちの最終科学力は、時間はともかく空間の秘密をほぼ手中に収めていた。

「なら、我慢しろ」

「リーダーは君だ。文句は言わんが、お互いの肉体の条件を考慮すれば、夜進んだ方がロスが少ないのではないかね？ 君も私を監視しやすいはずだ」

Dは旅人帽の鍰つばをそつと上げて、男爵を見た。さしもの吸血貴族が戦慄せんりつし、思わず引き込まれそうな瞳の色であった。

「監視して欲しいのか？」

と訊いた。

男爵の口元をうすい微笑がかすめたようだった。

「いや」

「断っておくが、おれがおまえを信頼しているなどとは考えないことだ」

Dは氷のような声でつけ加えた。